

第 18 章 アルジェリアの独立：1960 年～1962 年（23 歳～25 歳）

第一子誕生

最初の子を妊娠中の妻メサウダは、まめにアウレフの診療所の医師の診察を受け、子供も順調に育っていた。1960 年 9 月 24 日のこと、私が仕事から帰ると、メサウダはお腹がなんだか痛いと訴えた。彼女のお腹はまだそんなに大きくなく、私は産気づくにはまだ早いと思った。後で知った事なのだが、最初の妊娠ではお腹はそんなに大きくはならないらしい。そうと知らない私は、メサウダをなだめたが、痛みはどんどんひどくなっていくばかりだった。結局夜の 11 時ごろ、私は彼女を連れて歩いて、家から 200 メートルほど先の病院へ行った。当直の男性看護師は、歩いて病院の医師を迎えに行き、病院から 400 メートルほどの所に住んでいる医者は、これまた歩いて悠長に病院にやって来た。医師は病院に着くとメサウダを診察して言った。

「出産が始まるようだ。ただ、すぐに出て来るわけではないよ。もう何時間もかかるだろう。」そして、こう独り言を漏らした。

「初産では珍しくないが、どうも、難産になりそうだが…」

メサウダを見ると、陣痛はもはや耐え難いほどになっているらしく、顔は苦痛で歪み真っ赤になっていた。私は彼女が可哀想でならなかった。

「出産に父親が立ち会うのはいいことだ。そうすれば父親も、子育ては父親と母親の共同作業だってことや、子育てはもう出産の時から始まっているんだってことをよく理解するからね。」と医者は言った。

いよいよ出産となり、メサウダは傍らの私にありったけの力でつかまり、何度もいきんだが、赤ん坊はなかなか出てこなかった。この苦しみは一晩中続き、メサウダも疲れ果てて息も絶え絶えとなった。翌朝、1960 年 9 月 25 日の 9 時ごろ、医師は何か漏斗状の器具を母親のお腹に当てて胎児の心音を聞いていたが、こう宣言した。

「これは、もう待てない！子供もだいぶ弱っている。子供が出て来やすいように、産道を広げる処置をしなければ。ちょっとした手術をするよ。」と言った。（訳注：おそらく、今日でも一般的に行われている会陰切開。）

手術は麻酔無しで行われたが、陣痛の方が手術の痛みよりもずっとひどかったようだ。数分後、耳をつんざくような産声が産室に響いた。私たちの最初の子は女の子だった。やっと人心地ついて、改めて生まれたばかりの赤ん坊を見ると、なんと頭が円錐形に似た妙な形をしているのではないか。私はひどく心配になり、医師にどうしたことかと聞いた。

「大丈夫。難産や初産ではよく起こることだ。何日か経てば、普通の形に戻るから。」と医師はこともなげに言い、手術で切った傷の縫合を済ませた。

手術をしたのでメサウダは経過観察のため何日か入院することになり、彼女の姉さんたち、メバルカとファトマが付き添った。入院中は、彼女の方の姪っ子たちや、私の二人の姉たちもひっきりなしにお見舞いに行った。メサウダと赤ん坊は退院すると、私の父の家の方に行き、三カ月ほど同居した。娘が生まれてから 7 日目、私たちは親戚を招き、娘の

命名の祝宴を行った。地元の習慣では、赤ん坊の命名の儀式の時、祖先を祀る儀式も同時に行う。この時もメサウダの亡き両親を祭る儀式が同時に執り行われた。赤ん坊はファトマ・ゾーラと名付けた。この夜は、私の方の親や伯母、妹たち、メサウダの方の姉や姪たち、つまり新生児の母方父方両方の親戚が一同に集まり、にぎやかな宴となった。この慶事により、私たちが結婚する時の遺恨は完全に忘れ去られた。私達親子三人は、それからもしばらく私の父の家に同居した。自分たちの家へ戻って親子三人の暮らしを始めたのは、娘の誕生から 3 カ月以上経った 1961 年 1 月になってのことだった。やっと静かな暮らしに戻ったが、親になったといこうことで、全てが以前と異なって感じられた。私の日々の仕事は忙しく、時には 180 キロ東のインサラーへ出張しなければならなかった。私の留守中は、メサウダが家で一人にならないように、彼女の姉のメバルカが泊まりに来てくれた。



ハジ、メサウダ夫妻と長女のファトマ・ゾーラ

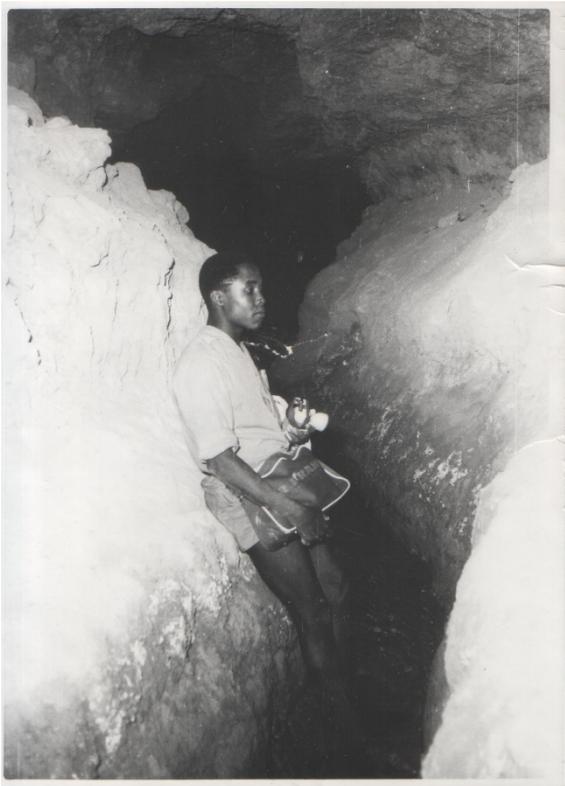
南フランスの思い出

1961 年 5 月、私は上司からの命令で、コートダジュールで行われる研修に参加することになった。ティディケルト地方の参加者の割り当ては合計二名で、インサラーの農業局のサラール・ナジ (Salah Nazi) とアウレフの私に白羽の矢が立った。近隣の地域では、ウアルグラ、ガルダイア、ラグアットの農業局も研修に人を送った。参加者一行は、ウアルグラの県庁所在地から飛行機で飛び立ち、アルジェを経由してマルセイユまで行った。この頃、空の便にはカラベル機 (訳注：フランス製の短中距離路線向けジェット機) が就航しており、快適な旅だった。私たち研修生は、はじめイストル市 (Istres) を振り出しとし、その後何か所もの研修地を回った。おかげで、マルセイユ、イエール (Hyères)、トゥーロン、アビニョン、ニース、モナコのモンテカルロなどを見ることが出来た。研修には様々な国から参加者があり、私はドイツ、イタリア、フランスやアルジェリア北部、それにサ

ハラ以南のアフリカ諸国出身の若者たちと友達になった。中でも特に、セネガル人とマダガスカル人の二人の女性と意気投合した。一人は、セネガルのダカールのソム・ティエ (Som thies) 地区の医師マイガ・アブベカール (Maïga Aboubekar) の娘で、名をマイガ・アミナタ (Maïga Aminata) と言った。その後彼女とは音信が途絶えてしまったが、彼女がまだ生きているのなら、是非もう一度会いたいものである。幸い、もう一方のマダガスカル人のアリーヌ (Aline) とは今でも連絡がある。アミナタについては忘れられない思い出がある。彼女は、私にこう提案した。自分はまだ独身だが、子供ができれば最初の息子には、あなたと同じアーメッド・エル・ハジと名を付けるから、あなたに次の女子が生まれたら、自分と同じアミナタと名付けてくれないかと。私はこの約束を守ったが、彼女の方については、その後音信が途切れてしまったので、どうなったか分からない。

およそ 2 カ月の研修の間、私たちは勉強や集会の合間にスポーツにも精を出した。この南フランスでの経験は、私にとっては、まさに美しい青春的一幕となった。その後も折に触れては、彼の地で撮った沢山のスライドを見返しては、過去の良い思い出に浸った。さて、研修が終わり、私と同僚のサラール・ナジは再びマルセイユからアルジェへと戻った。ただ、アルジェからの飛行機は、行きと同じウアルグラの飛行場ではなく、レガンヌのタルギア基地に降りた。そこで私達二人は二晩過ごし、三日目に基地の隊長の厚意により、軍用機でそれぞれアウレフとインサラールへ送ってもらうことになった。飛行機のコクピットの乗員は三人いたが、後部座席の乗客は私達二人だけだった。飛行機はたった 15 分ほどアウレフの空港に着陸した。私が降り、サラール・ナジがさよならと言うと、飛行機はインサラールへ向けて飛び去って行った。

フォガラ研究の始まり ～小堀巖教授との出会い～



1961 年の調査のためフォガラの水路の中に降りたハジ氏 (著者提供)

アウレフ駐留軍の隊長のところに、日本人の地理学者、小堀巖教授がやって来たのは 1961 年 10 月のことだった。教授は、アルジェリア南部に分布する伝統的灌漑システム、つまりフォガラに興味を引かれてこの地まで来たというのだ。隊長は私に、教授の案内をし、フォガラを見て回る手伝いをせよと命じた。

サハラ沙漠の面積は 800 万平方 km² に及び、ここに位置する国々の中でアルジェリアは最大部分を占める。アルジェリアの領土に占める沙漠の割合は 87%にも上る。一方で、この広大な地域に住むのは全人口のわずか 6%に過ぎない。乾燥度は非常に高く、降雨は極めて稀である。いっそ降らないと言ってしまってもいいくらいだ。今日サハラ沙漠は、世界で最も広大な沙漠であるが、この地の 6000 年前の様相は全く違っていた。そこには大きな湖や川が存在した。そのため、今でも堆積層の帯水層には相当量の化石水が眠っている。この化石水のおかげで、沙漠の民はオアシスを構成し、厳しい自然の下でも生活を営めるのだ。サハラで帯水層があるのは、大きく分けて、地下 20～30m の地点か、あるいは、100～300m の地点である。後者の方が一般に前者よりも水量が豊富である。サハラの一部では、帯水層は、降雨や遠くの山塊からの流水によって、部分的あるいは全面的に涵養されているが、ティディケルト地方の地下水に限って言うなら、科学的な調査の結果、全部化石水であることが分かっている。また当地の帯水層は水圧が弱いため、チットやインサラを例外として、自噴することはない。従ってアウレフでの地下水を利用しようとするなら、

トゥアット、ティミ、ティサビト (Tsabit)、グララと同じく、汲み上げのための仕掛けを作る必要がある。この仕掛けこそがフォガラである。

私は最初に、教授をアウレフのフォガラ「ベンドウーラ」へ案内した。2～3 日後には、今度は隊長から車を借り、私たちはアウレフの東方 50 キロの村チット (Tit) に向かった。チットではまずカイド (訳注: 1960 年代の当時では村長に相当) のところに挨拶に行った。小堀教授はカイドや他の村人に、チットのフォガラの来歴について質問した。それによると、ここのフォガラ「ジェネット・エルダ (Djennet Errouda)」の 20 本あまりの竪井戸は、シェイク・ババ・アブラフマン (Cheikh Baba Abrahmane) という聖人が悪魔を使役して一夜のうちに完成させたものだという。教授は、このフォガラの中を見たいと言ったが、カイドは不可能だと答えた。フォガラ「ジェネット・エルダ」に降りた者は皆、出て来た時盲目になっているので、この 20 年間に降りようとした者はいないというのだ。教授は、今でも水は流れているのかと訊いたが、もう涸れてしまっているという答えが帰って来た。その日の午後、私と教授はチットのナツメヤシ農園を見て回ったが、その時教授は私にこう質問した。

「村人が語ったことは本当かな？」

「人々が盲目的に信じていることが、真実からは程遠かったりなんて、よくあることですよ。」と私は応えた。

農園からの帰り道、教授は、明日もう一度行って中に降りてみようと言った。

翌日は、カイドが村人を一人私達に付けてくれた。私は勇を鼓して最初に竪井戸の中へ足を踏み入れた。後から教授が続いた。案内の村人は竪井戸の外に残り、私達の命綱を押さえた。フォガラにはまだ水が残っていた。ただし、流れてはおらず、水深はかなりのに及び、底に足を着けると水は肩まで達した。我々は水路を 20 メートル以上進み、時折立ち止まって写真をとったり、サンプルを採取したりした。しかし、内部に留まっていた時間は 45 分を越えなかったと思う。竪井戸の入口で待っていた村人に命綱を引っ張ってもらい、竪井戸の壁をよじ登って我々は無事地上に戻った。我々は村へ帰って、調査の結果を村人に伝えた。我々が無事帰ってきたことで、村人たちが、もう一度このフォガラを手入する気になるかもしれないと思った。フォガラが復活すれば、枯れそうになっている多くのナツメヤシも蘇るはずだ。なお、小堀教授と私にとっては、この時が、50 年余に及ぶ長い長い調査活動の始まりとなった。

1961 年 10 月のこの頃は、妻メサウダの二度目の妊娠が明らかになった時でもあった。一人目の時より、二人目の時の方が妊婦は大変なものである。何故なら、家事に加えて、まだ手のかかる一人目の子供の世話も同時にこなさなければならないからだ。一人目の出産後、メサウダはまめに医者診察を受けていたが、1961 年 4 月のこと、医者はもう母乳を止めるように言った。赤ん坊は 7 か月目に入っていたので、これは難なく行った。9 カ月が無事に過ぎ、1962 年 6 月 12 日陣痛が始まった。病院へ行ってほどなく、メサウダは第二子を出産した。お産は安産で、生まれた子は今度も女の子だった。当地の慣習に従い、子供の誕生から 7 日目にお客を招き、先祖を祀る儀式とともに赤ん坊の命名の儀式を執り

行った。私は、南フランスの研修の時の約束を守り、この時生まれた娘をアミナタと名付けた。



ハジ氏と小堀教授。おそらくハジ氏の訪日時に東京大学地理学研究室で写したものと思われる。(著者提供)

1962 年 7 月 5 日アルジェリア独立

白いガウンに身に包み、国旗と同じ配色の帽子をかぶった若者たちが、町を行進して行った。彼らは、ほとんど狂気に近いほど興奮していた。後からは水筒を下げた女たちが続いた。7月の太陽に熱せられた砂の上を行進するには、水の補給が絶対に必要だったからだった。女たちのユーユーという歓喜の音が暑い空気を震わせた。誰もが誇りと喜びで恍惚状態となっており、灼熱の太陽さえ苦にならないようだった。二列縦隊で歩調を揃え、扇動的な革命の歌を合唱しながら、彼らは歩調を緩めることなく進み続けた。行進の列は、三つの国の国旗をつなぎ合わせた横断幕を掲げていた。中央が新生アルジェリアの国旗、左がチュニジアの、右がモロッコのそれである。

この日も私は、いつもと同じように仕事に行った。ムニエ隊長がオフィスに入って来て、しばらく何かの書類をめくっていたが、突然口を開いて私に言った。この時点では、正式のアウレフの郡長は、まだムニエ隊長だった。

「見るがいい。形勢が決まってから革命の闘士を自称し出した連中だ。本当に命を張ったものより、そういう日和見主義のやつの方が、ことさら愛国者面をしたがる。やつらは権力を握るためならどんなことでもするぞ。連中は、本当の戦闘の最中には、知らぬ存ぜぬを決め込んでいたのを揉み消す必要があるからな。」

私は返事をしなかった。隊長は続けて言った。

「君も行け。行進している連中の仲間に入るんだ。でないと、裏切り者だと見なされて、後々やっかいなことになるぞ。これは私の忠告だ。」

隊長は一息入れると、最期にこう付け加えた。

「私は間もなくここを去るが、残る君は、新政府にきつと胸が悪くなるような幻滅を味わうことになるだろう。私には確信がある。大戦後のフランスもそうだった。それに、今から二年前にモーリタニアの独立（訳注：1960 年 11 月）にも居合わせたのが、やっぱり胸糞の悪くなるようなことが起こった。例えば、新政府がフランス軍の飛行場を接收しようとした時、ある大臣がその計画を聞きつけて、その土地を横取りしてしまった。そいつがどうやったと思う？飛行場跡に俄か作りの井戸を掘って、あつかましくもそこは元々は自分の土地だったと言い張ったんだ。国家機構がお粗末な国では、詐欺師どもはその弱点について、本当の善良な愛国者をしり目に、やりたい放題をするぞ。」

隊長の言葉に私の迷いは吹っ切れた。実は、私も同じガウンを持っており、独立の数日前から行われた予行演習には、私もそれを着て参加していたのだ。私は家へ戻ると、急いで着替え、行進の列に加わりに行った。だいぶ遅刻したことになるが、そしらぬ顔を通すことにした。時間は既に午後の 1 時を回っていた。汗が滝のように流れ、この日のための晴れ着を濡らした。

新指導部の無知と専横

アウレフの暫定郡長には、エル・ハジ・アマールという人物が任命された。しかし、この男は、もう行政は自分の思うままに出来るものと、とんでもない勘違いしていた。考えなしのこの男は、ろくな調査も準備もなしに、行政と学校のアラビア語化、それにシャーリアに基づく司法制度の導入を命令した。暫定郡長はシェイク・ベイと諮り、ダル・エド・ディアフという旅館を裁判所の場所に決めた。裁判官たちも任命されたが、シェイク・ベイが裁判長に、エル・ハジ・アブデラフマン (El-Hadj Abderrahmane) が次席の座に就いた。完全な無政府状態だった。私達若い者たちは、こんな出鱈目は何時までも続くものではないと思ったが、頑固頭の年寄りに意見することもできないでいた。そうこうするうち、大統領や教育大臣の演説がラジオで放送されるようになり、郡長たちは遅まきながら、行政とは自分たちの思い付きを命令するのではなく、上部組織の指令を待って実行に移すものだとようやく理解したのだった。

ところで、独立の 20 日ほど前のこと、エル・ゴレア出身のムーレイ・タイエブ (Moulay Tayeb) とシ・クイデル・トゥユス (Sidi Kouider Tyous) という二人がマキ (革命軍のアジト) から町へ降りて来た。彼らはエル・ハジ・アマールに匿われていたが、独立によってフランス軍が怖くなくなったので、公衆の場に出て来たのだ。この男たちは、以前フランス軍で働いていたアルジェリア人全員を集めると、その者たちを罵倒し、砂袋を担いで運ぶ強制労働を命じた。この二人は更に、エル・ハジ・アマールの息のかかった者たちばかりを地元評議会のメンバーに任命した。地元の人々は、自分たちには何の相談もなかったことを怒り、抗議のデモを行った。参加者の大部分は黒人だった。二人の元ゲリラは、10 人ほどのデモ参加者を逮捕した。中にはモハメッド・バカディール、私の父のモハメッド・ハマジ、サラール・アブダラー、モハメッド・アブデサマドなどが含まれていたが、皆黒人で、唯一アーメッド・シェリフだけがアラブ人だった。元ゲリラは、これら逮捕者を

殴り拷問したが、その場には町の名士達やイマームたちも立ち会っていた。翌日、シ・クイデルは、住民を大勢集めさせた。彼は私を名指しすると、こう聞いた。

「お前もデモに参加したろう？」

わたしは、していないと答えた。

「お前自身はいなかったとしても、父と母はデモの中にいたな？ そうだな？」

私は自分の身にも危険が迫っているのを感じ、インサラールへ逃げた。このデモ云々の尋問は口実で、シ・クイデルたちは実は予め目を付けていた三人、つまりハムウ・オジクス (Hamou Augeix)、アブデラフマン・リビブ (Abderrahman Lihbib)、それに私を逮捕しようとしていたらしい。このことは後になってから、モハメッド・エル・ファラーさん (前出：診療所の看護師) から聞いた。捕まれば酷い目に合わされるのは明らかだったが、神の恩恵か、ある日電報が来て、この元ゲリラたちはエル・ゴレアへ呼び戻された。